かささぎ通信　第134号

毎月第２金曜日 13：30〜15：30　　2024年　3月　8日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

２０２４年２月の「森三郎の作品を読む会」では、
「春」（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３年１２月）と
「あのころ」（『赤い鳥』１９３３年６月号所収作）を読みました。

「春」は、冬のある日の朝から夕方までを描き、まだまだ遠いと思っていた春が、意外にも身近に来ていたことに気づく田舎暮らしの男の話です。主人公の行兼は母親と妻子と共に父親から譲られた財産と田地とで暮らし、慰みに俳句などをひねって暮らしていました。その日は母と妻とが台所で朝餉の支度をしながら、ちょっとしたことで言い合いをしている声で目を覚ましました。行兼は食事も取らず、不機嫌な気持ちで家を出ますが、冷たい北風が吹き、灰色の枯野と冬田が連なる外の景色に、益々不機嫌な思いがあおられます。そのうちに冷たい雪まで降って来たので、行兼は俳句仲間の老人の家を訪ねました。三日にあげず口げんかの絶えない家族のことを思って、うんざりしながら、夕餉の頃までそこで過ごします。暮れかかる外の景色は相変らず春の遠いことを感じさせました。しかし、家の門の中へ一足入った時、紅梅の花が三つ四つほころびているのに気づき、その匂いを嗅ぐと、心の中もぬくもったような気がしました。家の中では、朝ごはんも食べないで外へ出たきりの行兼を案ずる母と妻の声がしています。「春はもう来ていたのだ。思いもかけず我が家に」と優しい気持になりました。

朝はネギの青い部分を捨てた、捨てないと言い争っていた母と妻が、夕食には「フキノトウのお汁」を温めて待ってくれていました。そこにも春の到来が演出されています。まだまだ冬の厳しさを示す情景の中、行兼の心の中に春が芽ぐんだところで話は終わっています。

この話は主人公が俳句を嗜む設定になっているので、雪が降りだしたところで「初雪や家の（ママ）ゐさうな人はたれ」という句を出しています。この句は芭蕉七部集の『猿蓑』（元禄四年［一六九一］）の発句集「冬」の其角の句「初雪や家にゐそうな人はたれ」を写したものと思われます。元の句の、初雪に浮かれて出て来たというような心持ちではなく、行兼の気持ちはそれとは対照的に「地上に訪れる春も、自分の心にめぐむ春も」「まだ遠いのだ」と、作者は言わせています。『猿蓑』を開くと其角の「はつ雪や」の句の前に膳所の画好の句「みぞれ降る音や朝餉の出来る迄」が並んでいます。三郎の「春」はまるでこの二句に触発されたような設定です。台所で朝餉の支度をする騒々しい声を布団の中で聞く行兼、声のとげとげしさが嫌で外に出ると雪が降ってくる、しかし最後は自分を待つ家庭の温かみを感じる、朝の母と妻との言い合いも自分の為に美味しい食事を整えようとする気持ちからだったのかもしれない、そんな想像さえ湧いてきます。

三郎さんは一九四一年冬から、柴田宵曲氏の手伝いとして政教社の雑誌『日本及日本人』の校正をしていました。宵曲氏は一九四〇年十二月には『蕉門の人々』（三省堂）を著しています。社の帰りに歩きながら「俳句の月並みというような、いろはのいの字から、ゆくりなくも教えて頂く結果になった」（「犬とどくだみ」日本古書通信）と三郎さんは書いています。読書家の三郎さんは宵曲さんから教わった本に目を通し、『猿蓑』も読んでいただろうと推測されます。

次の作品『赤い鳥』一九三三年六月号の「あのころ」は「北村よしの」名義の作品です。小学校五年生の女子が主人公ですが、女子児童を扱う時には三郎さんは女性名で発表しています。みち子が五年生の時まで住んでいた大きな造り酒屋の自分の家の庭には、一本の椿の木がありました。家の破産で引っ越し、みち子は女学校へは行きませんでしたが、その前を通って裁縫の稽古に通う時、椿の幹に転校生の「大野さん」の名前を彫り刻んだ「あのころ」を思い出します。東京からの転校生への憧れ、転校生・大野さんが悪気もなくみち子の気にしていることを言って、先生も友だちも笑ったことなど、読む側の胸もいっぱいになります。この話題は「かささぎ通信」31号、95号でも取り上げています。

〈次回予定〉　２０２４年４月１２日（金）午後一時半〜三時半
・「十二の桃（『雪こんこんお寺の柿の木』１９４３．１２）
・「フィルム」（『赤い鳥』１９３３．８）